

## 復興とは

私は昨年もこのフィールドスタディで北上町を訪れた。今回は2回目だったので、1年経って変わったと思ったことがいくつかあった。その中でも最も強く感じたのは、工事現場が増えたということである。石巻市には災害危険区域に指定され、復興記念公園になる予定の海岸沿いの土地があるが、昨年そこを訪れた際には、津波の被害を逃れた家がまだ何軒か残っていた。その家は立ち退きをまだ承諾していない家とのことだったが、今年はそのような家も見当たらず、すべて更地になっていて工事も行われていた。たった1年でも着実に変化しているということを実感でき、少しでも復興していると感じられたことが嬉しい一方で、やっと工事が始まったのかという印象でもあった。決して復興が終わったわけではないのである。私は復興に向けた工事という点で、家の再建と堤防の建設について見聞きしたことが特に印象に残った。

まず家の再建についてだが、漁業支援の際にお世話になったワカメの養殖をさせているSさんは、「仮設住宅から出て、自分たちの帰る家ができることが復興だ。」と仰っていた。もともと仮設住宅は、2年程度しか住むことを想定していない仮の住まいである。ところがその仮の住まいで暮らし始めて5年も経とうとしている。いくら道路が修復しても、家がなければ復興とは言えないのである。Sさんの息子のH君は、テレビとベッドのある自分の部屋が欲しいとも言っていた。家族や近所の人を気にしながら生活するというのは、今でこそ多少は慣れてしまったかもしれないが、最初の頃は相当なストレスだっただろう。私は避難所や仮設住宅で生活するような経験はもちろん一度もしたことがないので、自分の帰る家がないというのは今の生活からはあまり想像できない。しかし手放して安心して生活することはできないだろうな、というくらいなら想像できる。今回お世話になった、にっこりサンパークの仮設住宅は、他の仮設に比べると近所の付き合いが多く雰囲気の良い仮設だと聞いたが、都市部では住民同士の関係が希薄で交流も少なく、孤独死などの問題があり、もっと厳しい環境の地域もあるそうだ。話は少しずれるが、もし東京で同じような震災が起こったとしたら、仮設で暮らすのは北上町の人々よりさらに辛い環境になるかもしれないとも思った。

また、いまだに家が無いという問題がある一方で、4年半仮設住宅で暮らした中で得たものは大きいとも仰っていた。震災直後の一番大変だった時期を共に乗り越えてきた人たちとも、仮設を出てしまえば簡単に会うことはできなくなる。家族同然の仲間がいなくなってしまうのは寂しいとのことだった。公営住宅や集団高台移転が完成すれば移り住んでいくのは当然のことだが、仮設を出る人は仲間を置いていく後ろめたさや、残された人は仲間と離れる寂しさなどがあり、お互い純粋に喜ぶことはできない。また、第三者の私の立場からすると、言葉は悪いが4年半も狭いところに閉じ込めておいて、家が出来たから仮設から出て行け、と突然バラバラにされてしまうようにも感じてしまう。高台の土地の広さや個人の経済的な理由などで、すべてが上手くいく方法などないのかもしれないが、もう少しどうにかできないものなのか、ともどかしかった。

堤防の建設に関しては、町でいくつもの工事現場を見た。まだ堤防を建設するための土台を造っているところだったので完成した姿はあまり想像できなかったが、とても長い距離にわたって建設の工事が行われており、もし完成したら景色はかなり変わるだろうと思った。そして重要なことは、北上町の住民の中でも堤防の建設には賛否両論あるということである。

言うまでもないが、堤防を造ることのメリットは津波を防いだり被害を軽減したりすることができるということだ。しかし北上町の人々は昔から川や海とともに暮らし文化を形成し発展してきたので、川が見えるところに住みたい、という意見もある。堤防によってその関係がさえぎられるというのは、私たちが想像するよりも大きい影響があるのだろう。そうは言っても、あのような被害にあったのに堤防を建てないというわけにもいかない。両方の意見の間をとった選択肢としては、堤防の高さを抑えて家の二階からなら川が見えるようにする、といったことがあるそうだが、実際の距離と心理的な距離は違う、とも仰っていた。また、「堤防があるから大丈夫」という考えがうまれてしまい、次第に海や川から津波が来る危険のことも忘れてしまいかねない。それに加えて、高い堤防を造れば海や川から来る津波が見えなくなる。堤防は東日本大震災ほどの津波を防げるほどの高さではないため、見えなくなるということは、防げないほど巨大な津波が来た場合は逃げ遅れる可能性もあり今まで以上に危険だとも言える。生活の中でも海や川と疎遠になればそのような災害に対する関心も薄れやすくなるので、堤防が出来たとしても防災教育や啓発活動などはこれまで以上に重要になるだろう。震災以降、政府は国土強靱化計画とうたって様々な場所に堤防を建設している最中であり、今回見た場所もその一部だが、堤防を造って終わりというわけではないということをおぼろげに忘れてはいけないと思った。

以上のように、家の再建と堤防の建設について見聞きしたことから復興について考えてみたが、どちらも建てればそれで解決するという単純な問題ではないということをおぼろげに実感した。そしてまた、「復興」とはどうすることなのか、どうなることが理想なのかということをおぼろげに考えさせられた。被災した場所全てを震災前の状態に戻すことは不可能だし、そうすれば良いかと言われれば決してそうではない。震災から学んだ様々な教訓を、今後の生活に役立てていくことは必要である。どうすれば正解なのか、といったはっきりとした答えは5日間ではとても出なかったし誰にも分からないことなのかもしれないが、一つ言えることは、まだ復興は終わっていないということである。ほとんど被害にあわなかった私たちが、震災以前と変わらない日常生活を4年半送っていた一方で、北上町ではいまだに自分の家が無い人がいたり、昔からあった風景が大きく変わろうとしたりしているのだ。震災前と置かれている状況はかなり違うと思うが、以前と同じぐらい安心して暮らせる町が1日も早く戻ってくるよう願うばかりである。私が直接北上町の力になるということは難しいうえに労働力はもう必要とされているのか分からないが、東京からでもできることは少なからずある。まずは身近な人に震災の教訓や復興の状況を伝えることから始め、今後も北上町をはじめとする被災地に積極的に関わっていこうと思う。